

## 『節目の季節に想うこと』

文 伊藤公一

text by Kouichi Ito

3月と4月、毎年、この時期には、全国各所で送別会と歓迎会が行われるが、同業のなか、最も大掛かりな催しは大学教授の退任式、就任式である。

そこで、これらのお祝いに出席するのも、民間病院長の年中行事である。

例えば、院長職を継承し20年、それ以前の父から任された代理出席も含めれば、週末のホテル宴会場で開催される、これらのパーティに70回以上は出席している。

そこで今後の活躍が未知数である新任教授の晴れ姿も眩しいものだが、最近は、大きな仕事を成し遂げた退官教授へのお疲れ様会に出席するとしんみりする。

自身が歳をとったせいでもあろうか。事実、昔も今も教授の定年は65歳と決まっているわけだが、30歳代の頃、はるか年長者に見えていたパーティの主役が、まだまだ若々しく目に映る。

そして希望に満ち溢れる新任教授が自身より年下となり、気が付けば、案内される席次も段々と上座になってくる。

65歳という年齢。未だ達していないゆえ、想像がつかないところもあるが、定年制度とは、対象者にどんなに勢い

があっても、完遂寸前の仕事が残っていても、強制的に後進に譲らなければならない社会的ルールである。

理不尽に思えるところもあるが、経営者の視点に立ち、組織の発展を考えれば、止むを得ないものと十分に理解も出来る。

そこで最近の世の中を見渡すと、普通には疲れてしまいう年齢を迎えても、なお新しい挑戦に挑む人々が目につく。

国政をも揺るがしかねない大阪・森友学園の籠池泰典理事長は62歳。同盟国のドナルド・トランプ大統領は70歳。その選挙戦でしのぎを削ったヒラリー・クリントン氏も同年代。

そして何かと話題を振りまく東京都行政。決して攻撃の手を弱めない小池百合子知事も60歳オーバー世代である。

志や手法についてはあえて論評しないこととするが、普通の人々の定年年齢が近づいたり、超えたりしたうえでのチャレンジ精神には脱帽する。

一方、責められる側を見れば、引退するか否かと迷う都議会のドン・内田茂氏は78歳、防戦する石原慎太郎氏は84歳とさらなる高年齢。

このように、どこを見ても、お年寄り世代の動向が注目されている。

そこで生涯現役世代時代の到来とは言われているものの、現実的に定年制度を迎える勤務者、定年制度のない自営業者、どちらも切ないものがある。

それにしても都庁にて定年退職まで無難に勤め上げ、その後の人生をのんびりと過ごしている風の無名の元役人が、背広を着

て百条委員会  
で宣誓文を  
み上げさせら  
れる姿は、あ  
まりにも惨め  
だ。

還暦年齢を  
迎え、色々な  
ことを考えさ  
せられる春で  
ある。

## Profile

1958年生まれ。伊藤病院3代目院長。  
北里大学医学部卒業、東京女子医科大学大学院修了。医師  
になって以来、国内外にて一貫してバセドウ病、橋本病、甲状  
腺癌など甲状腺疾患に対する診療と研究にひたすら従事。  
東京女子医大、筑波大学院非常勤講師。日本医科大学、  
了徳寺大学客員教授。  
日本内分泌外科学会、日本甲状腺外科学会理事。厚生労働  
省診断群分類調査研究班班長。  
伊藤病院 www.ito-hospital.jp  
大須診療所(名古屋分院) www.osu-shinryoujyo.jp

